

## 岩手県野田村の支援・交流活動報告（2014年3月11日）

今回の活動は、野田村での東日本大震災犠牲者追悼式への参加でした。震災から3年が経過し、チームオール弘前で追悼式参加も3回目となります。参加者は、学生12名、市民13名、教員3名と、前日のシンポジウムに出席した研究者等7名の計35名でした。ボランティアのいわばリピーターのほか、初参加の民生委員の方々などもおられました。



バス車内の事務連絡



おりつめて集合写真

追悼式の前に、海まで、小雪のちらつく中、津波で洗われた地を歩きました。いまだ更地が広がり、震災から3年を経ても復興が目に見えたかたちで進んでいないことは明らかでした。ただし、前年の訪問時には見られなかった、土地区画整理事業の看板、いわゆる第三堤防にあたる盛り土、第二堤防（線路と道路）と第三堤防の間の公園事業の看板や、再建中の家があり、村のハード面の復興は少しずつ進みつつあることがうかがわれました。



海へと続く道



土地区画整理事業の看板



盛り土断面と公園事業の看板



それぞれの思いを胸に歩く参加者

途中で、カメラで一带を撮影していた野田村出身の方（現在は久慈市在住とのこと）に出会い、被災前の村の様子などについてお話いただきました。外部の訪問者にとって、この方のような地域と震災の語り部が野田村にいるとよいと思われました。



野田村出身の方との語らいと記念写真撮影



再建中の家



追悼式の模様（きてきて久慈サイトより）

追悼式は 14 時 30 分に始まり、私たちは一般席で出席させていただきました。追悼式後は、城内地区児童クラブに顔を出し、短い時間でしたが、参加者有志で子どもたちと戯れました。別に、ろうそくに火を灯す企画を耳にし、ボランティアとしてお手伝いしたかったところ、夕方から開始とのことで、弘前に戻る時間の関係でやむなく断念しました。



児童クラブにて、子どもたちの元気さに救われる

以下は、帰りのバス車内で語られた参加者の感想からの抜粋です。参加者それぞれが、震災を自分の問題としてとらえ、追悼式に臨んだことが伝わってくる内容でした。

- ・ 3 年も過ぎたし変化があるかと思ったら、更地のまま、家が一軒か二軒だけだった。
- ・ 追悼式に参加できて良かった。家でテレビを見て、職場で黙祷するよりも、厳粛に受けとめることができた。
- ・ 一日、震災からのことをずっと思い出していた。
- ・ 追悼式で知っている人に会い、来てくれたんですねと言ってくれた。また野田村に通いたい思いになった。
- ・ 自分がやってきたことはあまりにも微力と感じてしまい、手が震え、自分に追悼式に出る資格があるのかと考える場面もあった。
- ・ 生きたくても生きられなかった人が大勢いる。自分たちが生きていかなければならないと強く思った。
- ・ 遺族の方の挨拶であったように、このいまわしい震災を忘れないで後世に残して欲しいという思いを、自分も抱いた。
- ・ 忘れないというより、色々含めて、僕の一部になっていればいい、忘れないという思いも含めて、今まで僕であるというか、野田村があるから今の僕があるという思いを強くしていけばいいかなと、そうすれば忘れずにより自分の一部として振り返ることができるのではないかと思いはじめた。
- ・ 野田村は、野田村の人だけの居場所だけでなく自分たちの居場所でもあるので、少しでも良くしたい。
- ・ 1 人も死なないようにできないかと頭の中に引っかかっていた。若い皆さん、答えは出ませんか。

- ・震災はまだ終わっていない、すべきことはまだあると思った。
- ・何回来ても、いつ良くなるのか、やるせない気持ちの方が多いが、気をあらためていかないといけないと思った。

早くも「来年もまた追悼式に参加したい」という声も上がり、今回の追悼式参加は、2014年度も引き続き、弘前から野田村へ通い続ける思いを新たにする契機となったようです。

(担当：飯考行)